

第3回 兵庫型「体験教育」の評価・検証委員会 次第

日 時：平成22年12月16日(木) 14:00～

場 所：兵庫県民会館7階「亀」の間

1 あいさつ

2 兵庫型「体験教育」の評価・検証委員会による提言(案)について

(1) 協議

「 ．兵庫型『体験教育』のこれまでの経緯と実施状況」

「 ．兵庫型『体験教育』の基本的な理念」

(2) 協議

「 ．兵庫型『体験教育』における課題」

「 ．系統性のある効果的な教育活動とするために」

「 ．体験活動の成果を子どもたちの日常に根付かせるために」

「 ．県民すべてがかかわる兵庫型『体験教育』とするために」

3 その他

第3回 兵庫型「体験教育」の評価・検証委員会 議事要旨

平成22年12月16日(木)14:00~16:00
兵庫県民会館 「亀」の間

1 開会

2 挨拶

開会后、大西教育長が挨拶を行い、兵庫型「体験教育」の評価・検証委員会による提言案についての審議を依頼した。

3 資料説明

協議に先立ち、兵庫型「体験教育」義務教育部会・高等教育部会からの報告及び兵庫型「体験教育」の提言案についての説明が義務教育部会長、高校教育部会長、及び事務局から行われた。

4 協議

委員A

大変すっきりわかりやすくまとめられている。昭和59年から平成9年まで、文部省の「自然教室推進事業」によって、兵庫県も含め全国的に「自然の家」を設置するなどの取組がなされてきた。しかし、国の事業が終わり、全国的には長期間の自然体験が減っていく中、兵庫県はむしろ充実してきている。近年では、国は兵庫県の体験活動をモデルにして、様々な体験活動の充実を打ち出すようになってきた。このことをもう少し強調してもよいのではないか。

平成20年の学習指導要領の改訂では、より実践的な力の育成が一層重視されている。兵庫型「体験教育」は学習指導要領改訂の方向性に合致しているということを押さえる必要がある。

さらに今回の改訂は、体験活動が強調されており、中教審では、小・中・高の各学校段階において重点的に行われる体験活動として、小学校は自然の中での集団宿泊活動、中学校は職場体験、高等学校は就業体験・ボランティア体験、となっていて、まさに兵庫県は先取りして取り組んでいる。加えて兵庫県は中1に「わくわくオーケストラ教室」という文化芸術体験を加えており、これは国が示したものにさらにプラスした形になっている。私なりに関連づけて言えば、これは、教育基本法で伝統文化の尊重を新しく加えたことに対応しており、兵庫県が先駆的に取り組んでいると言えるのではないか。

委員長

兵庫県が先駆的にやってきたこと、それがいまや全国的な広がりを見せようとしているというような文言を加えた方がよい。

委員B

「言葉で『振り返らせる』」という言語活動の視点は重要である。発表会や報告会などの具体例もあると分かりやすい。

委員C

「地域貢献事業」に関する記述の中で、「地域のニーズに応じて」や「各校・各地域のニーズに

合わせて」などの記述があるが、活動の趣旨を考えると「地域のニーズ」という表現で統一した方がよい。

インターンシップに関する記述の中で、職業学科では「インターンシップを体験する」とあるのに対して、普通科では「普通科等において・・・インターンシップを行い」とあり、表現を統一した方がよい。

「地域貢献事業」の課題について、「より多くの生徒が参加できるような機会を提供するなどの条件整備を行う必要がある。」との記述があるが、まさにその通りだと思う。しかし、高校生は労働力として活用できる成長段階に入っており、場合によっては、高校生が単に労働力として使われる場合がある。具体的には、最初はお祭りへの協力依頼であったのが、回数を重ねると、何人が派遣をお願いしますというようになる場合がある。地域貢献事業の場合は、教育の要素を十分に押さえておくことが必要である。最初は意欲的な高校生も、「使われているだけではないのか」という感想を漏らす場合もあり、教育活動としての趣旨を重視するということについて記述していただきたい。

「就業体験事業」の課題は、産業の現場等におけるインターンシップは、受入先企業の開拓や確保が難しいことである。CSR（企業の社会的責任）の一環で協力いただいている場合がほとんどであるが、実際には企業の負担は大きく、企業がここまでしなければならぬのかという不満を持たれる場合もある。また、景気が良くなっても悪くなっても受入を断る企業もある。「すべての生徒がインターンシップを体験することをめざす必要がある」との記述があるが、実施段階を考えると非常に大きな課題がある。

「就業体験事業」の普通科における課題について、やはり、普通科は卒業後の進学を最優先に考えざるを得ない状況があり、インターンシップを全員にとなると、実施は困難である。

委員D

体験活動をいかした教育活動を「組み立てる」とか、体験活動を「仕組み見守る」ということに異論はなく、子どもたちが体験活動を通じて学ぶことはたくさんあるが、教員自身も、普通の学級づくり等の活動の中で、子どもたちが自ら考えて動けるような力を育むという視点が重要である。これに近い表現はあるが、日常的教育活動全体を通して子どもたちの自主性を育成するという視点を取り入れてほしい。

「トライやる・ウィーク」については、マンネリ化の問題があるが、前回にも話があったように子どもたちにとっては初めての体験である。ところが、一部かもしれないが、受入事業所の選び方で、子どもたちが意欲をなくしていることがある。具体的には、学校が子どもたちに受入先リストの中から活動先を選ばせており、生徒の希望に添った活動先となっておらず、マンネリ化につながっていると聞いた。学校の先生方は非常に大変だが、できるだけ子どもたちのニーズに応えてやろうとすることが大切である。

人間関係の希薄化などの問題意識があり、「自然学校」は友だちとのつながり、「トライやる・ウィーク」は地域の方々とのつながりなどの趣旨で事業が誕生している面もある。そのことを踏まえると、「絆に感謝し、感謝される体験」という表現があるが、人と人との深い結びつきがあってそれに感謝するのか、活動に参加することによって人と人との深い結びつき、絆が生まれてく

るのか、表現を工夫すべきである。

言葉で「振り返らせる」ことの重要性はよくわかるが、言葉によって表現することが難しい子どもたちへの配慮をお願いしたい。

委員 E

全国的に言えることだと思うが、自主的に動いていこうとする子どもたちが非常に少ない。指示を待っている子どもたちが非常に増えている。「自然学校」というゆったりとした時間の中で、事前の計画から運営を子どもたちにまかせていく、ということが大切である。日常の教育活動の中でも子どもたちの自主性を尊重した活動を教員は心がけるべきであると思うが、現実的には「自然学校」が良い機会になっている。

地域や大人が関わる事業として、年配の方々にもどんどん学校に入ってきていただいております、兵庫型「体験教育」はすばらしい取組になっている。

委員 F

地域や家庭における教育力の向上について若い世代の保護者にどのように伝えていくかが大切である。

委員長

地域の教育力と言っても、具体的な中身が見えにくい。家庭や地域への発信の方法も工夫すべきである。

委員 G

「県民すべてがかかわる兵庫型『体験教育』」とあるが、今までは「トライやる・ウィーク」や「就業体験事業」の受け入れ側に、どういう子どもたちを育てたいのかが、よく伝わっていなかった。今回まとめた子どもたちに身に付けさせたい力等について、受け入れ側にきちんと伝えるようにしていただきたい。

委員 A

全国的に夏季休業中に自然体験を実施する市町が多い。指導体制や授業時数の問題等もあると思うが、兵庫県はどのような状況か。

(事務局)

昨年度は新型インフルエンザによる学校閉鎖の影響で、一部の学校が「トライやる・ウィーク」を夏季休業中に実施したケースがあるが、通常の「自然学校」「トライやる・ウィーク」ともに、学期中に実施している。

委員 A

体験の内容によっては、夏季休業中での実施も検討してみてもどうか。

これからの課題のひとつとして、質の検討をしていく必要がある。例えば、集団活動の楽しさを目的とするなら肝試し、自然の神秘を実感させることを目的とすればナイトハイクなど、活動内容の質についても検討していく必要がある。

野外活動については専門的な知識がない教員もあり、野外活動の効果的な指導のやり方、プログラム開発等、野外活動に関する研修が必要ではないか。

「体験活動の目的や性質を考慮すると、体験活動は教科との結びつきよりも、特に学校行事を含む特別活動や総合的な学習の時間、道徳の時間との関連性が高い。」という記述について、文脈の意味は分かるが、学校行事の趣旨は、日常の学習活動の充実・発展にある。このことを踏まえると、教科で学んだことを、総合させたり、発展させたりというのが体験活動であり、体験と教科との結びつきは重要であることを考慮していただきたい。

委員長

今後の体験活動の課題として、授業時間の確保などいろいろあるが、学習指導要領は最低基準になっており、学校の判断で、設置者と協議の上で時間等を決定できるようになっている。がんじがらめではないので、必要な体験活動などがあれば、長期休業の活用も含めて、各学校や市町の創意工夫を促すような記述にすべきである。

委員H

提言案については、基本的に賛成で、よくまとまっている。特に、体験活動を「仕組み見守る」ことが非常に重要である。企業でも「指示待ち人間」「ロボット化」は課題となっており、学校でも社会でも同じ課題がある。この兵庫型「体験教育」を推進し、自ら学び考え、行動する場を仕掛けて、我慢して見守るとというのが重要である。

「学校と地域を結び、連絡調整を行うなど、コーディネーター役となる教員等を明確にし」との記述があるが、コーディネーターは教員に特定しなくてもよいのではないか。社会のOBになった人たちなど、ボランティアに積極的な人や経営者団体、シルバーカレッジなどの協力を得ていくことも有効である。

委員I

全体としては非常によくまとめられている。一番大切なことは、体験活動が孤立しないよう、道徳だけではなく、教科とのつながりを持たせることが大切である。さらに、教科との関連性を教員が意識し、意図的に関連づけることを積極的にやっていくことが重要である。

放課後子ども教室等、子どもたちが地域の方と直接かかわる体験は意義深い。地域と学校をどうつなげていくかということをもっと意識的に考えていく必要がある。

兵庫型「体験教育」の各活動は、子ども・教員・保護者にとって意義深い活動である。しかし、アンケート結果等を見ると、教員の評価よりも、子どもたちの評価が低いように感じる。ネガティブな評価をした子どもや教員にとって何が問題だったのかを分析することが、必要だと思う。

体験活動を進める中で、兵庫県の不登校の人数が減るなどの成果が出ればよいと思う。

委員長

「トライやる・ウィーク」をきっかけとして、不登校の子どもたちの登校率が上がったというデータは、はっきりと出ている。

体験活動に関しては、体験を経験化するときには意識されず、ずいぶん時間が経ってからよい効果が意識されることもあるので、長い目で見て、成果を検証するという領域であるという認識も必要である。

委員 A

「学校・家庭・地域の連携」の表現は、「学校・家庭・地域等の連携」として、教職をめざす大学生なども含めていただきたい。全国的には、大学生が、インターンシップや学校ボランティアのような形で体験活動に取り組んでおり、そのような記述にしていきたい。

委員長

兵庫県でも、多くの大学生が学校現場に入っており、提言本文中に記述してください。

委員 C

ある専門学科では、体験活動を重視した教育課程を編成しており、生徒は自主的に考え行動し、コミュニケーション能力は高い。このため、大学進学後も、その大学の中核的な学生となって活躍しているが、体験重視の教育課程を編成すると普通教科の履修に手が回らなくなり、大学進学の見込みが狭められてしまっているという課題もある。

高校では、夏季休業中にインターンシップをさせるところが多い。高校生ともなると研究や開発の体験をしたいという希望もあるが、企業秘密等の壁もあり、受入先の確保という面で課題がある。また、生徒の希望と受入企業がマッチングしないという課題もある。

委員 J

工業高校にいと、インターンシップの重要性を強く感じるが、2割程度しか実施できていないことは、残念である。

家庭や地域の教育力の向上について、若い保護者ほど仕事を持っている人が多く、子ども会やクリスマス会などのイベントでも、子どもだけ参加させて保護者が参加しないという課題もある。

委員 K

ずいぶんよくまとめていただいていると思う。ただ、「言葉で振り返らせる」という使役的な表現が気になる。大切なのは、振り返った中身で、それを言葉として紡ぎ出すことを意味していると思う。だから、「振り返って言語化する」や「振り返って言葉で表現する」など、もう少しアクティブな表現に変えてはどうか。

委員 G

兵庫県は、先導的に体験活動に取り組んでいるが、例えば、全国学力・学習状況調査で成績が良い、若年層の犯罪率が低いなどの成果は出ていない。体験活動の成果はどこに還元されているのか、あるいは、もっと成果が出てくるようなやり方がないのか、ということについて考えていく必要がある。

委員長

そこはなかなか難しいと思うが、大都市圏を抱えている兵庫県が、本当だったらもっと大変に

なるところが食い止められているという見方もできるのではないか。

そもそも、体験活動の成果は、すぐ学力のようなものに結びつくのではなく、一生涯を生きていく上での土台作りとなるようなものではないか。「生きる力」を、「我々の世界を生きる力」と「我的世界を生きる力」の2つの側面から見ると、「我々の世界」には、学力や進学実績など、世の中を生きる力が入り、「我的世界」には、今回、平成20年1月の学習指導要領改訂のための中教審答申の「一人一人が豊かな人生を送っていくために必要な力」が入る。

兵庫型「体験教育」はもちろん、「我々の世界」で生きていく上で役に立つものであり、例えば、「就業体験事業」などはまさにそうである。しかし、内面の世界そのものを豊かにする「我的世界を生きる力」の土台を作るのも体験だと思う。もちろん、学力が低くて良いなんてことはないが、私は兵庫県の子どもたちが、こころ豊かに生涯を送っていける土台を作っていく取組として、兵庫型「体験教育」をとらえないといけないと感じる。

委員H

兵庫型「体験教育」を県立だけではなく、神戸市立と私立に広げて、兵庫県下の学校すべてで取り組んでほしい。

(事務局)

神戸市立学校と私学の状況について、小・中の4事業とも神戸市立学校も同様に取り組んでいる。私学についても、知事部局の教育課において、同様の取組をする学校には補助金を出しており、数校が「トライやる・ウィーク」に取り組んでいる。「わくわくオーケストラ教室」についても、希望する学校は参加できるよう配慮している。

委員A

(「地域に学ぶ『トライやる・ウィーク』推進事業」の評価・検証)において、「人間関係の深まり等」の記述があるが、「トライやる・ウィーク」だけではなく、「自然学校」等他の体験活動でも、間違いなく大きな効果があり、全国的にも成果が出ている。特に集団宿泊を通して、人間関係が濃密になるという成果ははっきりしている。「トライやる・ウィーク」の箇所だけではなく、総括的なところで、ぜひ、人間関係づくりとしての効果について強調していただきたい。

委員F

学校に行くことが難しい子どもたちや、不遇な環境のため施設にいる子どもたちが、一学期は登校していても、夏休みを挟むと2学期に登校できなくなる場合が多々ある。学校の先生だけに負担をかけるのはよくないと思うが、夏季休業中等に有効なプログラムが準備され、人間関係等が深まっていけば、その後の生活につながっていくのではないか。

委員長

最終的な提言の文言は、今日の議論を踏まえて事務局で整理していただき、私と両部会長とにまかせていただくということでご了承いただきたい。(了)